

図書館

電子制御工学科 新海 聡子

みなさんは、図書館が好きですか？

私は、高校三年生の夏休みから、大学受験が終わる日まで、休みの日はいつも図書館に通っていた。通っていた図書館は、市内で一番大きい「中央図書館」。自宅近くにある区の図書館ではなく、「中央図書館」である。その図書館は、「中央」と名の付いている割には、交通の便が悪い場所に位置し、街中から更に市電に乗って、少し郊外に向かわなければ辿り着けない場所にあった。そのため、私の家からその図書館に向かうには、片道約一時間の時間を要した。

朝、図書館の開館時間に間に合うように家を出て、五時の閉館と同時に家路につく。それが、私の休日の過ごし方であった。何故、休日は図書館に通ったのか、時間をかけてまでも「中央図書館」へ行っていたのか、それには理由があった。まず、図書館に通った理由はただ一つ。私は昔から家では全く勉強しない、というか、勉強をしようと思っても全く手につかないタイプの人間であったので、大学の受験勉強に追われていた私は、迷わず家から出ることを選択したのである。では、近くの図書館には通わず、何故、「中央図書館」まで通ったかという、それには複数の理由があった。

まず一つ目に、図書館に通うためにかかる「一時間」という時間が、なんとも丁度よかったのである。休日に限らず、中学生の頃から、私には乗り物に乗っている間の習慣があった。それは、乗り物に乗っている時に、英単語、英熟語を覚えることである。私が育った街の地下鉄は、初めて目にする観光客は皆驚くが、車輪がタイヤであるため、走行中は大変静かで、快適である。もちろん、停車や発車の際には多少揺れるが、さすがに通学で六年間も地下鉄を利用していると、片手に鞄、片手に本を持って立っていても、ふらつくこともなく、バランスを取るのはお手の物だった。そのため、車内ではいつも英単語か英熟語の本を見ていた。言い方を変えると、乗り物に乗っている時以外は、単語と熟語の本を開くことなど全く無かったので、乗り物に乗っている時間は、私にとってとても貴重だったのである。

二つの目の理由は、その図書館で勉強をする人が大変多かったからだ。同じ学校の友人もよく見かけた。友達の友達と友達になることもあった。話したこともないけれど、互いに通っている学校と名前は知っている、そんな変な関係もあった。その図書館に通っていた受験生は、みな黙々と勉強し、疲れたり、集中力が切れると、外のロビーで飲物を飲みながら気分転換をしていた。そんな時に、自分と同じ受験生と会話を交わすこともあった。通っている学校はどこか、志望校は決まったか、勉強は進んでいるか、そんなことを一通り話した後、また、各自勉強に戻る。「大学」という、自分と同じものを目標としている人と交わす会話は、大変刺激的で、自分も頑張ろうという活力になった。

大学へと進学した私は、大学でも同じように図書館に通っていた。大学では、繋がりよく講義が開かれることは少なく、朝一の講義から自分が選択した次の講義まで、数時間空くということも珍しくなかった。そんな時、私はいつも図書館で時間を潰していた。図書館で過ごす空き時間を利用して、講義で与えられた課題を解き、実験のレポートを仕上げていた。決して、まじめだった訳ではない。理由はただ一つ。放課後は、部活をし、バイトをし、そして、思う存分遊びたかったからだ。

私は、昔も、今も、家では全く仕事をしない。今考えると、家では勉強ができず、必ず図書館に通っていた当時の私を、そのまま引きずっているのかもしれない。図書館に通っていて、本当に良かったと思う。あの時があったから、大学時代も図書館にいる自分に違和感を感じることはなかったのだと思う。大学受験を決める高校三年生まで、勉強なんか大嫌いで、成績も学年最下位に近かった私が、単位を落とすこともなく、無事大学を卒業できたのは、空き時間を図書館で過ごす「癖」がついていたからだと思う。

今でも、あの時通った図書館を思い出す。勉強に行き詰まって見上げた天井。ロビーの椅子。そして、いつも図書館で見かける彼。

図書館に通った三つ目の理由は、憧れの彼に逢うことだった。もちろん、図書館に通いだした頃は、こんなことは理由ではなかった。彼に逢えることが、いつしか楽しみになっていたのである。その人と話したことはなかった。恥ずかしくて、目も合わせられなかった。もちろん、名前も知らない。その人の後ろ姿を見ることで精一杯だった。だから、今思い出せるのは、彼の大きな背中だけ。彼がいなければ、図書館通いも途中で挫折していたかもしれない。そうすると、今の私もないのかな。

恋も、いいものだね。